

伊藤祐二（作曲家）

ユージ 芹に

気をつける

「松平頼暁 88歳の肖像」(10月30日 オペラ
シテイリサイタルホール)

松平頼暁は、私が尊敬する作曲家の一人。と言うよりも、かれこれ40年ほど、事あるごとに的確で怖い、でも心のこもったアドバイスをいただいたき、本当にお世話になってきた。感謝。(20代の頃に言われた一言が、今日まで私を貫いている。)

このコンサートでは、音楽作品を中心に、7曲が演奏された。聴き進むうちに、とてもいい気分になった。何という幸福なコンサートだろうか。演奏者の皆さん(全員とは言わない)が、作曲者をリスペクトし、作品に真剣に挑戦し、素晴らしい技量を発揮しつつ、演奏する喜びを高揚感をもって感じさせてくれるのだ。これは、言葉のレトリックでは無い。様々な困難を伴う現代曲のコンサートでは、なかなかこれは実現できない。素晴らしきコンサートだった。

一方、私のなかでは、奇妙なずれが生じていた。(もう一度書くが、言葉のレ

トリックでは無い。コンサートは素晴らしかった。)私の認識していた松平作品と、目の前に素晴らしく演奏されているものとの間の奇妙なずれ。

私の中で松平作品は、不透明な存在物なのだ。それは、安易な感情移入、共感を拒む。それでいて、構造的な成り行きを追っている、(演奏が優れている時には)突然、素晴らしくチャーミングな姿を見せる。しかし、そのチャームを捉えようとすると、するりと逃げ去る。そして、チャームどころか、何かとても辛い、苦いものに突き当たるとある時、とても自由でアナーキーな開放感を感じさせるが、気づくと、構造が鳴っている。私の中で松平作品は、うまく説明できない不透明な存在物としてあるのだ。しかるにこのコンサートでは、演奏者の共感と素晴らしい技術によって見事なコンサートピースとして歌い切られていて、不透明感はない。私は混乱し、考えている。このずれは、どこから生じたのか。まだよく分からないが、とても興味深い。

「ベルリン・東京 実験音楽ミーティング」(10月31日〜11月3日 ゲーテ・インスティトゥート東京ホール)

(4日間のうちの、第1日、第2日)
〔「実験音楽」という言葉の定義を皆で確立したいものだ。〕

1日目は、即興演奏の日。さすがに足立智美がピックアップしているだけあって、皆素晴らしい技術。ウチ・ヴァツサーマンの声のパフォーマンスの圧倒的な技術、マティアス・パウアーのコントラバスの即興、まるで映画の一シーンを見ているような錯覚を覚えた。サックスの坂田明がゲストのセッションでは、坂田のフリージャズ的なセンスが、他のミュージシャンのフリーな即興とからんで、すごくかっこいい。でも、私個人は、どうしても即興演奏って体質に合わない。2日目はヴァイオリンのピリアナ・ヴチコヴァの「書かれた音楽」によるリサイタル。企画監修者の鈴木治行作品を始め、力作が並ぶが、ペーター・アブリンガールの繰り出すノイズの切断力は強く、松平頼暁70年代のエレクトロニクス作品も、同時録音で重ねられる音の群れの上ではじける、リングモジュレーションがかけられたピチカートは強く、素敵だった。ダイレクター足立智美作品が最後に飾り、大好評だったが、ちよつと上手過ぎ、確信犯過ぎて、苦笑いしてしまった。